

幼児の教育 第99巻 第4号 平成12年4月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可 ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2000 / 4



第99巻 第4号 日本幼稚園協会

平成10年改訂対応

幼稚園教育要領解説

付録 平成10年改訂・幼稚園教育要領全文

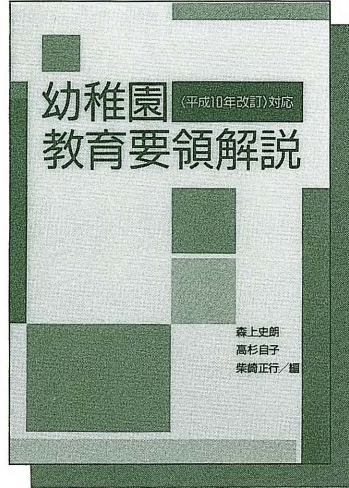
平成10年に改訂され、今年から実施される新『幼稚園教育要領』をより深く理解するための、教育要領解説書の決定版！

第一線の研究者・保育者が結集し、理論・実践の両面から、新教育要領を総合的に解説します。

森上史朗 高杉自子 柴崎正行／編著

A5判・並製・カバー付・288頁

定価：本体1,600円＋税



【主な内容】

- 第一章 幼稚園教育要領はどのように変わってきたか
—元年から10年までの子どもを取り巻く環境の変化と、改訂までの概略—
- 第二章 幼稚園教育の考え方の基本
—平成元年教育要領の基本を解説—
- 第三章 幼稚園教育の充実と発展(10年改訂のポイント)
—元年教育要領との相違点を詳しく解説し、新教育要領がめざすものを、くっきりと浮かび上がらせませす—
- 第四章 幼稚園教育要領の内容
—教育要領の組立て、子どもの生活と遊び、各領域の意味と相互関係について、詳しく解説します—
- 第五章 幼稚園教育を計画し実践するために
—指導計画作成のための考え方の基本を詳説します—
- 第六章 教師の役割
—10年改訂で強調された“教師の役割”のポイントについて詳説します—
- 第七章 幼稚園運営の弾力化
—これからの幼稚園運営の方向を明らかにします—

好評
発売中

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第99巻 第4号



幼児の教育 目次
— 第九十九卷 第四号 —

© 2000
日本幼稚園協会

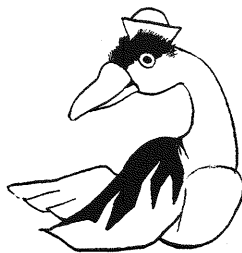
巻頭言

エネルギーの蓄積と借金の取り立て……………鳴澤 實……………(4)

私が幼児教育を志した頃(6)……………津守 真……………(9)

いま、子どもたちは 母子のいま(1)母親の状況……………山崖 俊子……………(18)

教育の力と形……………田代 和美……………(26)



耳をすまして 目をこらして……………宮里 暁美…(32)

幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤― (一)ふるさとの関信三……………国吉 栄…(34)

幼児のコミュニケーション―保育の現場から考える(2)―……………田中三保子…(42)

比企の畑から・春……………小宮山洋夫…(49)

「観察」徒然草……………砂上 史子…(54)

表紙絵／田中 千尋

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



エネルギーの蓄積と 借金の取り立て

鳴澤 實



二十数年間公立大学で専任カウンセラーとして学生の相談に携わって、人の発達について教えられることが多かった。なかでも次の事例はその後の研究を促してくれた。

暮れに近い頃、四年生が指導教員に紹介されて不登校の相談に来た（昔は意図的にさぼる学生が多かったが、今は心理的に登校できない学生や院生が

増えている）。三年の専門科目を履修し出してから学科不適應を感じ始め不登校気味になり、後期はかなり迷っていたようである。そうとは知らない母親がいつもの通り朝起こしに行くが、起きないので、痺れを切らして最後には布団を剥ぐとかの直接行動に出て一悶着になる。これを毎日繰り返していたことがその後来談した母親の話から分かった。

母親は開口一番、「この子は双子の兄で手のかからない育てやすい子だったんです。弟は一時も目の離せない落ち着きのない子でした。その弟は今では私のところに来るのはお金が欲しいときぐらいで用事を言いつけようとしてもいないのに、この子は今すぐ手がかかるんです。毎朝大変なんですよ。起こすのに。どうしてこうなんでしょうね」と言われました。

この話を聞いて、手のかからなかった（つまり乳幼児期にエネルギーを蓄積することが不十分だった）子どもが課題や障害にぶつかったときに、問題を克服したり解決したりするエネルギーがなくて、その補充のために母親と悶着を起こして無意識的に補充作業をすることがよくあるが、それだと感じた。勿論これだけではなく発達の実付けになる資料を聞き出して予測するわけである。

この学生は一年以上母親と起きる起きないを繰り返していたので、母親との無意識的な目的はかなり

達成されているはずであるから、もう母親に手を引いて貰っていい頃合いである。そこで「しばらく様子を見たいのでお母さんがかかわらないで下さい。ほっと置いて置いて下さい」と申し上げたのですが、「だめです。私がこんなに毎日大学に行かせようとしているのに手を引いたらますます悪くなってしまふ」と言って頑なに私の頼みを聞き入れようとしない。幸い翌日寄られた父親が理解してくれて、しばらくして母親は本人にかかわらなくなった。母親が干渉しなくなると、この学生は登校するようになったのである。

母親が一年以上も子どもにかかわり、その後父親が登場してきて母親から子どもを引き離して子どもが動き出すようになったが、この手順は重要である。エネルギーを蓄積してしかる後に自分の足で歩かせることである。以下長くなるが補足説明をしておこう。

小中学生や大学生や社会人などの登校拒否や出社

拒否の事例とかかわってみて分かったことは、赤ん坊が一人前の大人になるためには親を始め周囲の大人が手を掛けてあげなくてはならない一定量がありそうだというのである。私の臨床経験では次頁の図の(イ)のような曲線になる。縦軸が「手のかかる量と質」、横軸が「年齢」である。生後三〜四歳ぐらゐまでが最も手がかかり、それから徐々に手を抜いていき、自律していくようになるが、思春期直前に来るべき荒波を乗り越える準備をするかのように再び親の手を煩わせることがある。従って小さな山がまたできる。

生後三歳ぐらゐまでの乳幼児は、母と子の蜜月時代で多くは母親に抱かれたりしがみついたりお乳を飲んだりして母親の側で過ごすことが多い。猿の親子を連想してみていただきたい。子猿は周囲が平穏だと親猿から少し離れてあれこれ珍しいものを触ったりなめたりして遊んでいるが、しばらくたつと慌てて母親のところに戻ってしがみついて母乳をも

らったりする。人間の子どもも全く同じだが、人間の場合には母親に抱っこして貰いながらさらに母親との言葉のやりとりや情緒的な交流がある。母親が子どもの顔を見ながら「いいものみつけたのね」「びつくりしたのね」「よかったね」「なんでしょね」などと子どもにも働きかけると子どもは言葉でこそ応答をしないが目や表情で種々応えてくれて、こころの交流が行われる。実はこのようなやりとりやスキンシップが子どものその後の発達にとっても大切なのである。

エネルギーもこのような親子の情緒的な交流やスキンシップを通して蓄積されていく。勿論この時期だけでなく、幼稚園や小学校低学年ぐらゐまでは目に見える形で日々補充される必要がある。子どもは何かにつけて「お母さん、お母さん」と言つて母親にかかわりを求めるのはエネルギー補充の意味もある。この蓄積されたエネルギーが発達課題をこなしたり障害にぶつかったときに乗り越えたり克服した

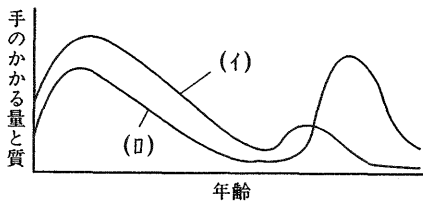
りする力になるのである。動物の実験では親動物にスキンシップやマザリングをよくして貰った子動物とそうでない子動物ではストレス耐性が異なり、前者の方がストレスに耐える力があつたと報告されている。

今の子どもたちや若者が些細なことで退行して家に閉じこもったり逆にキレたり問題行動や学級崩壊を起こすなど行動化してしまうのは、社会的経験が乏しいからということもあるがなによりも精神的に脆弱で挫折しやすいからである（意識下では満たされていない感じもある）。前者は義務教育年齢が高齢化するほど社会的経験の機会は減少するから仕方ないが、後者は子育ての問題が関与している。子どもの数が少なくなつて親が子どもに以前よりも手をかけすぎているのではないかと思われがちであるが、手を抜かなくてはならないときに手をかけること（過保護）があつても、肝必要の手をかけなくてはならないときに手をかけていないのではないかと

私の臨床体験からは思われる。

一般的にもテレビなどの映像文化が親子の間に介入する時代になって、気付かない内に親子の関係、蜜月時代の密着度が稀薄化して来ている。極端な話ではテレビにお守りして貰つて育つてきたと思われずともなきにしもあらずである（こういう子はいつまでたつても自分中心で相手の人の気持ちや理解できないので人との関係が容易にもてないで、トラブルメーカーになるか孤立しやすい）。

今の子どもたちの多くは図の(ロ)のような曲線（左半分）だと思ふことが多い。手をかけられるべきところで手抜きになつたまま育つてきているので、障害にぶつかったとき容易



▲図

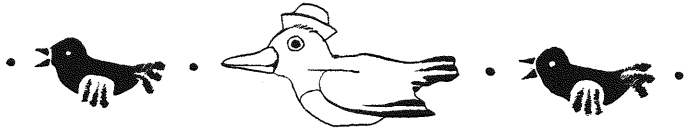
に自己解決できないで周りの大人、多くは親の手を煩わせることになってしまふ。閉じ籠もりや問題行動を起こしてSOSのサインを出して手を煩わせるようになるので曲線(口)は右の方に大きな山ができる。さながら幼児期の借金取りである。前述の事例はまさにその典型的な例である。小学生の頃に症状を示してこの山になる事例は容易に解決できるが、年齢が進むに連れて利子が加算されるだけに問題の解決は容易でなくなる。

先の事例に戻ると、母親はスキンシップやマザリングなどを通して子どもに基本的なエネルギーを補給しところを育む素晴らしい子育て機能を持っているが、いつまでも抱え込んでいると子どもは自立できなくなってしまう。普通の家庭では両親の仲が良ければ自然に子どもは母親から離れて自立していくものである。子どもが不登校を起こしたりして退行(子どもがえり)して母親のかかわりを無意識的に求めてきたときには、その意味を理解して子どもの

求めに心理的に応じてもらわなくてはならないが、母親が前述の事例のように子どもの行動に巻き込まれて現象を客観的にみられなくなって際限なくかわってしまふことが多い。そこで無意識的な目的が果たされた頃合いを見て父親が登場して、密着している母親と子どもを分けてあげることが必要になるというわけである。

なお、母子密着時代の父親の仕事は基地としての母親機能の安定化とその維持である。母親が不安だとその不安は子どもに伝染して情緒不安定な子になる。基地はいつも精神的に安定していて子どもの不安を吸収して癒してあげる必要がある。母親基地の安定化こそがこの時期の父親の仕事であることを強調しておきたい。

(大妻女子大学)

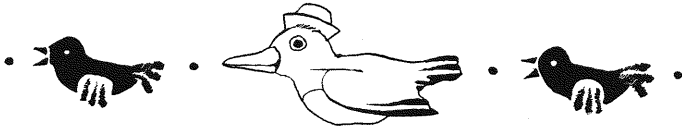


私が幼児教育を志した頃(6)

津守 真

科学としての心理学との出会い

戦後直後の昭和二十一年、二十二年、破れたガラス窓の教室で、外套の襟を立てて吸い付けられるように私共が聴いた講義は、哲学から独立して歩み始めた科学としての心理学であった。戦争による破壊の後、何事も新しく第一歩から始めようという気概の溢れていたこの時期、それまでに染み付いた価値から解放されて、個としての人間を研究しようとする科学的心理学は時代の要求にも適していたのであろう。その頃の研究態度には批判する点もあるけれども、いまなお自分の中に生きている真実を含



んでいる。

事実と理論の透明性

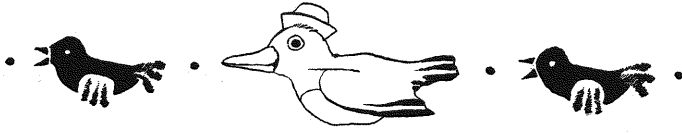
当時、東大文学部心理学科教授の高木貞二先生は、とくにティチエナー (E. B. Titchener) の実験心理学の考えを好んでおられた。『実験心理学』『初心者のための心理学』などの著者であるティチエナーがモットーとしていたのは「透明さ (トランスペアランシー)」であった。色眼鏡なしに透明な眼で事実を見ること。そのような事実を積み重ねて理論を作ること。理論もまた単純で透明でなければならぬ。

「人がある事柄について、明晰で偏見のない意見を求めるならば、多くのことを忘れて、恰も以前には何も知らなかったようにそれを見ることを始めなければならない。

— E・B・ティチエナー」。それは主として知覚の分野のことだったが、ひろく真実に向かう研究者の基本的態度であると私は思った。

実験心理学の初歩の心得—「実験の結果が研究者が予期したように進まない場合でも、それを調整しようとしてはならない。思ったように進まないというその事実をこそ尊重せねばならない」。他者である人間は、研究者の枠組みに入りきれないということ、子どもの研究の基本の心得でもある。

価値を離れて事実と向き合うためには、「科学は実用を目指してはならない。実際に役立つということは、科学の副産物にすぎない」とティチエナーは述べる。直ちに

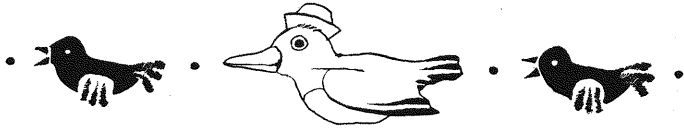


正反対の考えも出るし、それも否定できないが、研究があまりに役に立ち過ぎるとあやまちを犯すことはこの半世紀の歴史の中で私共が見てきたことである。

当時、高木先生は山雀（やまがら）の知覚の研究をしておられた。「動物心理学は、本能とか知能とか大きな分野を見渡すのではなく、小さな行動から樹立せねばならない。またすべての行動はできるだけ簡潔に解釈されねばならない」とかく大きな問題を考える傾向のある私はこのことを印象深く聞いた。そして「今日は高木先生の講義を聞いて蘇生した感があった」とノートに記した。後に保育の実践の中で考えるようになった私は、眼前の小さな現象を考えることの面白さと重要さを知り、この言葉を思い出した。

高木貞二先生は事実と理論との両方の透明さを重んじられた。頭が熱くなるまで考えると、入り組んだことが次第に澄んでくると先生はよく言われた。それには時間がかかる。子どもの現象には大人と子どもが入り組んでいて、透明とは程遠いことが多い。もともと生命性は混沌のなかにある。人為的に理論の枠にはめると生命性が失せてしまう。簡単に割り切らないで時間をかけるうちに次第に澄んできて、全体像が見えてくることは、保育の中で私共はしばしば経験するところである。

事実とは何かという根本的な問いはあるにせよ、事実を積み重ねる中に法則を見いだそうとする所に科学としての心理学の方法がある、我々はまだその出発点に立ったばかりであるというのが、この時期の学生の心意気だった。「人生から夢を生み出し、



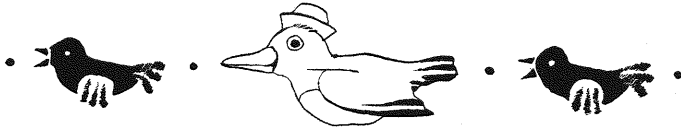
夢をひとつひとつ現実としてゆくことが人生である」というマリイ・キューリーと言葉、「科学と平和とが無知と戦争とに勝ち得るであろうことは動かすべからざることであると信ずる」というパスツールの言葉を教えられたのも爆風で破れたままの硝子窓の教室であった（昭和二十一年三月六日）。

オペレーショニズム―操作主義

オペレーショニズム―操作主義は、この時期に教えられたもうひとつの科学方法論であった。「科学的概念はそれが得られた具体的操作を明らかにすることによってのみ、はじめて正しく客観化される」という主張である。「事実」は、それが得られた具体的手続き（操作）を示すことによって、またその範囲においてのみ妥当する。それなしに「事実」を絶対視することはできない。

実験心理学においては、ある結果が得られるまでの手続きを厳密に吟味することができる。その同じ手続きを踏むならばだれでも同じ結果を得られることが確かめられたときに、それは公共の科学的知識となる。つまり反復可能性である。このような科学的知識を積み重ねることによって知識の体系が出来上がる。この時期に、象牙の塔を作り上げるのがアカデミックな学問の理想と考える傾向も生じた。後に分かかってきたように、知識の体系も常に開かれていなければならない。

子どもについて言うと、ひとつの行為には多くのことが関係していて、同じ出来事



が反復されることはない。教育や保育の場で起こることは一回限りである。大人自身
がそのときに全人格をかけて応答することによって次の場の展開はかわってくる。ど
んなに科学的に確立されたように思われる理論体系でも、そのまま具体的な保育の場
に応用することはできない。当時はそこまで気が付かれていなかった。

復員して軍隊服のまままで大学にあらわれる先輩の学生を日々加えて、教室は活気に
満ちていた。講義の合間に三四郎の池の水の面、青空にもくもくと湧き上がる雲を眺
めて、友人たちと共に、もはや軍隊に行くこともなくひたすら学問を追求できること
を感謝した。

私の日課は、朝、焼け跡を耕して植えた南瓜や甘藷を見回ることから始まったし、
リュックサックを背負って食料の買い出しに行くのも相変わらずだったが、自分が心
行くまで疑問を探究できたことは、戦後直後の日本の青年に与えられた恵みであつ
た。日本各地で民主主義を学ぶ青年学級が始まり、中、小学校で新教育の実践が試み
られたのもこの頃であった。

児童心理学

子どもの発達を純科学的に研究し始めたいと考えた私は、どこから着手したらよい
か、高木貞二先生の研究室を訪ねた。先生は、子どものことは分からないがと前置き
されて、自分が関心をもっている空間定位の研究はどうかと言われた。上下、左右、



前後等の方向知覚は発達のどのようであるのか。常に仰臥している赤ん坊にとつて、上とは頭の上方なのか、それとも天井の方向なのかというような問題である。はいはいをし、立ち上がるようになるときにそれはどのように変化するのか。更に、幼児になつたとき、「真直ぐ」というのは、自己の身体方向によつて規定されるのか、それとも空間の物的配置によるのか。例えば鉛筆を「真直ぐに置いてください」と指示を与えて、部屋の中央に斜めに置いた机に向かつて歩いてゆかせたとき、子どもは自分の進行方向を規準にするのか。机の方向や形、部屋の方向、歩いて行く方向などの条件をかえたらどうなるか。私は親戚の子どもや日曜学校の子どもたちにもこの実験をやつてみた。若いときにはこういう普段見慣れないことをやるとひどく学問的なことに思えて得意な気持ちになるものである。

その結果を大雑把に言うと、容易に予測できるように、幼児は自分の身体の方向を規準にし、小学校三年生くらいからは机の方向が規準になり、その後は規準の取り方の自覚によつて基準は相対的に変わる。勿論すべての子どもがそうだというわけではない。ひとりひとり違う。子どもは最初は実験を面白がるが、条件をかえて繰り返すうちに興味が失せ、私の方も類似の条件の反復に疑問を持つに至つた。しかしこの後、子どもとの生活の中で私は折りにふれて上下、左右、前後などの意味について興味をもつて考えるようになった。これを比喩的に考えると更に面白い。最近の私の著書『保育者の地平』（P.12—22）で子ども時代の空間体験を考えたととき、この実験

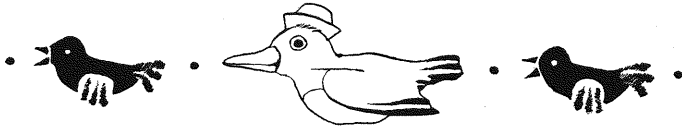


が私の頭にあった。

フォルケルトの『実験児童心理学』

当時、東大心理学教室には児童心理学という名のつく書物はごく僅かしかなかった。その中にフォルケルト (J. Volkelt) の『実験児童心理学の進歩』(一九二六)があった。一九四六年頃には一九三〇年代の洋書は新しい部類だった。W・シユテルン夫妻の『七歳までの幼児の発達』は古典的児童心理学書だったが、一九一四年の出版で余りに哲学的に見えた。後になって人間科学の観点からこれは洞察にとむ著作であることを知ったのであるが。

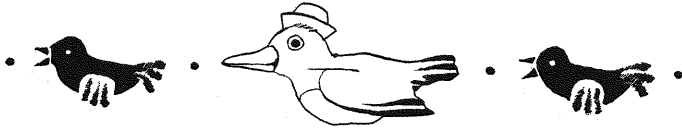
このフォルケルトの書物のなかに実物模写の研究があった。立方体、円筒、円錐を机の上において、「この通り描いてください」と子どもに指示する。子どもは立方体を模写するのに、展開図のように、見えていない面まで描いてしまう。また、円錐を描くとき見えていない底面を丸く描く。子どもは見えたように描くのか、それとも知っていることを描くのかという古典的課題がここにある。更に、円錐の頂点の尖った部分を手に持って描かせると、子どもは頂点を何重にも丸く塗りつぶす。触運動感覚が描画に大きく作用するのである。それから二十年以上も経過後、私は実験ではなく、自分の子どもたちが自由に描いた描画の研究をすることになるが、このときに考えたことが下地になっているような気がする。



ゲゼルの発達研究とCIE図書館

当時G H Q（連合軍総指令部）が日比谷の濠端の第一生命ビルにあり、その並びの日比谷交差点の角に、占領軍のCIE図書館があつて、一般に公開されていた。二階の図書室のインフォメーションデスクには米国婦人が座つていて親切に対応してくれた。とくに心理・教育の分野の専門書が豊富にあり、新着のジャーナルが開架式書棚に並んでいた。米国の教育使節団が来日したのもこの頃だったから、心理教育関係の図書がとくに多かったのだろう。東大の心理学教室とは比べ物にならない、明るく新式な図書室だった。ジャーシルト（A. T. Jersild）のチャイルド・サイコロジでもそこではじめてみた。カーマイケル編のマニユアル・オブ・チャイルドサイコロジ（L. Carmichael Ed. 『Manual of Child Psychology』）を見つけたときには、戦時中にも地道に続けられていたアメリカの児童研究の集大成にふれて、天にも昇る心地がした。

以前に私が旧制高校の時に愛育研究所で目にしたアーノルド・ゲゼルの『Atlas of Infants』のその後の著作である『First Five Years』や『Five to Ten』もそこにあつた。これは実験心理学の科学研究とは違い、子どもの生活の全体を具体的に知ることができた。標準場面が設定されるとはいえ、それは生活場面に近いもので、いわゆる知能検査のように人為的に作られた状況ではない。ゲゼルは子どものことをよく知っており、生命的な遊びをよく知っていることは、数字の並ぶ研究書の行間から窺え



た。実際、彼は一九二〇年代にイエール大学児童研究所にナースリースクールを創設している。私が数年後にアメリカに留学したときすでに、心理学者の間で、ゲゼルには理論がないという批判を受けていたが、私は彼ほどに子どもを多く見ていた心理学者はいないと思った。ただ、この時代の科学的研究方法ではこれ以外に表現の仕方なかったのだと私は思う。

戦時中の暗い精神主義教育の後、科学は世の中に明るさをもたらすシンボルであった。一九四六年、一九四七年の初期の時代の科学心理学から私は大切なことを学んだ。そのことを記したいと思った。

方法という語は、ギリシャ語の*hodos*（道）から由来している。道はどこかへの道である。目指すところに導かないときには迷い道になる。目指すものが何なのか分からなかったら、いかに方法が精密で厳密であっても、それは無意味になるだろう。この後、一九六〇年代、行動科学全盛の時代を迎えることになる。

私は保育の実践の中で子どもを考える間に、関係の中で生成する子どもの研究は自然科学とは全く違う方法論に立たなければできないと考えるに至ったが、それは長い模索の後のことである。

は は こ
母子のいま

(1) 母親の状況

山 崖 俊 子

はじめに

またもや身のすくむような忌まわしい事件が起きた(文京区音羽の事件)。しかし誰もが心のどこかで「ああやっぱり……」と半ばいつかはこの種の事件が起きることを予測していた。関連の報道を耳にしながら被害者およびそのご家族に対する深い哀悼の気持ちは勿論であるが、同時に容疑者である母親とその子どもたちに対して言葉には尽くせない^{いたわ}労^{いたわ}さとやりきれなさを感じてしまう。この事件に関する詳細を知らないものが憶測であれこれ論じることが、公に報道された情報を突き合わせてみると容疑者であるこの母親は決して特別に極悪でも凶悪でもなく、事件の切っ掛けとなった状況もごくありふれた、どこにでもありそうな、そしてその心理的狀況も多かれ少なかれ誰の心の中にもありそうな気がすることから、この事件に対する人々の関心は異常と

も思えるほどである。そしてそうだからこそ逆に不安と恐怖をおぼえるのだと思う。

そこで今回の事件から連想される一般性を中心にすえながら、今日の母子が抱える諸問題について考えてみたい。そして第一回目の今回は特に「今日の母親の置かれた状況」に焦点を当てようと思う。

「母親」に期待されているもの

今の時代は老若男女を問わず様々な生きかた（ライフスタイル）が許され、認められる社会状況である。というよりそう思い込んでいる。勿論、時代とともに認められる枠は確かに広がってきている。しかし思っているほど本当に広がっているのだろうか？「女性」ということに限って言うならば「結婚するかしないか」「結婚年齢」「子どもを産むか産まないか」あたりまではいろいろ取り沙汰されるにしても、それでもまだ「世間の目」は寛容である。

しかし、問題は子どもを産んで母親になったとこ

ろから始まる。勿論「母親」に対する「世間の目」

も全く変化していないとはいわないが、依然として極めて保守的である。すなわち、子どもは家庭で、しかも一対一で育てられるべきであり、乳幼児であればなおさらという考え方である。さらにこれがエスカレートして家庭で母親に養育されなかった子どもは将来、特に思春期以降非行になりやすいといわれ、思春期以降に何らかのトラブルを引き起こした子どもが、乳幼児期に母親の手を離れて保育所等で育てられていたということになれば、「ああ、やっぱり……」ということになる。

すなわち、家庭を離れた保育所等における子育てはその前提に子どもにとっては本来望ましくないものという、かなり根強い思い込みがある。しかし様々な事情で止むなく子どもを他者に預けなければならぬ場合に備えて保育所は設立されたわけ、まさに「背に腹はかえられない」存在として、保育所等集団保育は位置づけられている。従って、積極

的利点はないが、可能な限り「負」の要素を取り除こうというのがこれまでの乳幼児保育研究であり対策であつた。その証拠に保育所は、保育に欠ける乳児または幼児を保育することを目的とする、「児童福祉法」に定められた児童福祉施設であり、「保育所への入所措置基準」として第九条の三に「…児童の保護者のいずれもが次の各号のいずれかに該当することにより当該児童を保育することができないと認められる場合であつて、かつ、同居の親族その他のものが当該児童を保育することができないと認められる場合に行うものとする。」とあり、各号として①昼間労働することを常態としていること。②妊娠中であるか又は出産後間がないこと。③疾病にかかり、若しくは負傷し、又は精神若しくは身体に障害を有していること。④同居の親族を常時介護していること。⑤震災、風水害、火災その他の災害の復旧に当たっていること。⑥前各号に類する状態にあること、となつている。

現実はその自治体で状況に応じたゆるやかな措置基準が定められてはいるが、基本的な考え方は前述の通りであり、実はこの感覚は我々の中に奥深く刷り込まれており、理屈抜きで母親に抱かれてゐる子どもは幸せそうと感ぜられるし、そうでない姿には憐憫の感情を呼び起こすという、我々の「思い込み」が根深くある。

一九九五年にマツダ財団の助成で行つた我々の調査研究でも、乳幼児をもつ母親たちの圧倒的多数がそう思い込んでいるという結果が出ている。すなわち、「『三つ子の魂百までも…』といわれるように子どもが三歳までは親の手で育てるべきと思うか？」という問いに対して「常勤」の母親の六十九パーセントがそう思うと答えており、「パート」の母親が八十四パーセント、「自営」の母親が八十一パーセント、「無職」の母親は九十一パーセントがそう思うと答えている。この結果をどう読み取るか解釈はいろいろあると思うが、少なくとも乳幼児を育てて

いる母親の多くが、職業をもつていようがもつていなかろうが、自らが「自分の手で今の時期は子育てをしなければ良い子に育たない」と思い込んでいる。

勿論、乳幼児の育ちにとって親、特に母親の関わりが重要であることを否定するものはいない。しかしどうしても「産みの母親」でなければならぬのか、そうであるとしたら「産みの母親」のどの要素が不可欠なのか、この点に関する検討がなされない限り「母親」なるものに込められた限らない期待の大きさに母親たちは押しつぶされてしまう。「子育て」にこれで十分ということはなく、やれどもやれどもまだ不十分という思いは真面目な母親ほど抱きやすい。我が国における、幼い子どもをもつた母親への育児に対する大きすぎる程の責任は「儒教」の教えの影響ではないかとも考えられる。

「母親」であることの実感

「母性」に関する研究は少なくない。その中心的

テーマは「母性とはもともと女性に備わっているものなのか」あるいは「子どもを産み育てる中で育まれるものなのか」に大別される。筆者の個人的感覚からするとそのどちらもそうであるような気がする。

大日向雅美はその著『子育てと出会うとき』（NHKブックス）の中で「従来の母性観が今の人々の暮らしにそぐわない側面が大きくなって、さまざまな問題を輩出させているにもかかわらず、従来の母性観を絶対とする信念を変えようしない人々は、異口同音に『子どもを産んだ女性が子育てに専念するのが人間の自然なあり方であるから。そして、それは古今東西普遍的な事実だから』といえます。しかし、それは本当なのでしょう。古来どの民族も必



ず母親が全面的に子育てにかかわってきたのでしようか。実はそうした母性観は近代以降の社会的状況に即して作られてきた比較的新しい考え方なのです。社会の変遷にしたがい、母性を強調して母親の育児責任を強化する必要性が生じた結果の母性観なのです」と述べ、我が国やヨーロッパにおける子育ての有り様についてその歴史を紐解きながら、どのような社会の状況下でそうした母性観が生まれ、強化されてきたのかを明らかにする中で、今日の社会を支配している「母性神話」が社会の要請によって意図的に作られたものだと述べている。さらに、「母親は子どもに対して本能的な愛情を所持するものであり、それを発揮してこそ女性であるとする新しい価値観が出現したもう一つの社会的背景として、産業革命の台頭とそれに伴って『男は仕事、女は家庭』という性別役割分業を基本とする近代家族の登場があげられます（落合恵美子『21世紀家族へ（新版）』有斐閣選書、一九九四年）。近代家族は職

住分離の社会構造を支えるものとして出現し、特に女性に対しては、その家庭を運営すること、とりわけ子育てに専念する意義が当時の医者や教育学者といった知識人によって啓蒙されていきました」というわけで大日向はこれを「母性イデオロギー」と呼び、この思想は女性にとってその存在意義を証明するものとして歓迎されたと指摘している。

この説明には十分に納得しながらも、筆者は極めて重要な視点の欠落を指摘せざるをえない。それは自らの体内に九ヵ月間の永きに渡って子どもを宿し、厳しい痛みとの闘いを経て「出産」をなし遂げた母親にとって我が子の存在は理屈抜きで自らの「分身」として感じられるはずである。この感覚を「母性」と呼ぶか否かは別として、この「分身感覚」は良くも悪くもその後の面倒極まりない「子育て」の作業を成り立たせる原動力となっているはずである。しかしながらこの感覚が「子育て」にとつて必ずしも良く作用するとは限らない。それは例えば

「母子心中」という形で表れたり、「虐待」になったりする。自らの「分身」であればこそ自らが所有するものであり、そうであればこそ自らの思いでいかようにでもしてよいし、逆に「始末」も自らの責任において済まさなければならぬ。こうした発想は例えどんなに幼い子どもであっても、母親とは別の一人の人格を有した存在であるとした現代の考え方からすれば誤った発想と非難されるかもしれないが、母親の感覚からするとあまり罪の深さを感じないのではなからうか。知的レベルでとらえる母子の関係と身体レベルでとらえる関係とはかなり大きな隔たりがあるように思う。その良い例として最近のアメリカでは子どもの所有をめぐる様々な議論がなされているという。いわゆる「代理母」であり、子どもの母親は卵子提供者なのか、子宮提供者なのかという問題である。その殆どが当初の契約の時点では子宮提供者は極めて冷静に、時にはビジネスとして自らの子宮を貸与するつもりでいたもの

が、およそ九カ月の間自らの体内で幼い命が共に生きていくことを実感するうちにいつしか思いが大きく変化し、そのあげく「出産」という極めてドラマティカルな体験をする中で当初の契約を変更したいという思いから、その結果子ども「所有」をめぐる凄まじい闘いが繰り広げられることとなるのである。この「身体」で直に体験した感覚は「知」をコントロールすることができないほど大きいものだという点は、母子問題を考える際に忘れてはならない点である。

分身感覚と子育ての責任

自らの体内で我が子を育みさらに出産を体験するということは、母体にとっては思いがけない変化を引き起こすものである。これは精子提供者が父親になるといふ感覚とは良くも悪くも本質的に異なるものである。「母親になること」が極めて生理的体験の中から生じるのに対して、「父親になること」は

知の作業を通してのことであることを考えると、両者の我が子に対する感じ方には大きな違いがあることは確かである。それぞれの感じ方を指して「母性」「父性」と呼ぶことはこれまでのこれらの言葉に対して与えられていた概念規定にかなり混乱があることを考えると、ここではあえてこれらの言葉を用いることは避けたいと思う。

これまでの多くの人々の育児の適任者は母親であるとする発想の根源は、まさに母親の我が子に対する「分身感覚」「一体感」のゆえであった。子どもが泣けば母親自身も胸が痛み、子どもが誉められれば母親は即、我がことのように嬉しくなる。そんな関係にあれば産業革命以降、近代の社会構造を支えるものとして登場した職任分離を前提とした、いわゆる近代家族が夫婦の間に役割分担を余儀なくされたとき、多くの夫婦が「育児」の担い手に母親を選んだのは恐らく母親自身の希望であったに違いない。

しかしここで問題にしななければならないのが、その決定が子どもにとって或いは夫婦



にとつて、果して最も適切であったかどうかという点である。これらの検討が十分になされないままにこの役割分担があなたも当然のこととして、最も理に適ったものとして引き継がれ、さらに「性別役割分業」という言葉で表現されるように、この役割は「性」に伴つてもつて生まれたものとして規定し、その役割が果たせない者は人間として劣った存在であるといったきめつけがなされてしまったという問題である。女性であることがイコール母親ではないし、母親もそれぞれ個人差があつて当然であり、また分身感覚が「良い子育て」を生み出すという保証もない。しかし、純粹に自らが希望して「育児」を担当するならばそれはそれで問題はないが、現実

多くの母親がそうであるからといってそうすべきという決めつけは本末転倒である。

おわりに

少子化が進む今日において「子育て」に対する期待の大きさは異常とも思えるほどである。その中で母親に向けられた期待は期待を通り越して有無を言わさぬ力で責任を押しつけている。何が良い子育てなのかどうすることが良い育児なのかの議論よりも、どれだけエネルギーを子育てに向けたかが厳しく問われ、量る物差しとして母親は自らに問われることにエネルギーを割かない、まさに「滅私奉公」が期待される。そうでない場合は「母性」が不足しているという烙印を押され、ひいては人間性まで問われることになる。

もともと母親は自らの分身といった感覚が強く、どんな母親も我が子の不幸を望んでいるものはいない。結果的に不幸にさせてしまうのは母親自身のお

かれた状況があまりにもゆとりを失っているとき、自暴自棄に陥り我が身を傷めるのと同じ意味合いで分身である我が子を傷めてしまうのだと考えられる。

母親が生理的に感じ取る「分身感覚」を「母性」という名のもとに一層強め揺るぎないものとして母親に強いていることに対する批判が、いわゆる「母性神話」批判である。即ち母子心中や虐待等あたかも「母性」欠如の母親の仕業と考えてられていることが、実は「母性」を義務として母親に逃げ場を与えない世の中の風潮の責任であることを肝に銘じなければいけない。

(津田塾大学ウェルネスセンター)

教育の力と形

田代 知美

秋に市内の小・中・養護学校の児童生徒が一堂に会する音楽会が三日間に亘ってあった。合唱や吹奏楽、マーチング、管弦楽等々それぞれの学校のスタイルで参加する会だった。MはA小学校の吹奏楽部の部員として参加した。私は三時間もいなかったのだが、素直に音楽というものが持つ力に改めて驚いたり、感動したりするとともに、へそ曲がりな性格が頭をもたげて、素直にはなく大人と子ども、先生と生徒のことを何となく考えていた。列の形態を変えながら演奏するマーチングというものには、一糸乱れずという形態に興ざめた。素直にはなくという点では、すんなり興ざめできた。幼児が運動会で組体操をするのを見たときと同じだった。いやその時ほどではなかったか



もしれないが、一緒にみんなで何かを作りあげようという気持ちを育てること一つの形を作る事を目的にするのは別だよなあ……というような感じだったと思う。

でも中学生の合唱を聴いているときにはこれとはまた違う複雑な思いが生じた。四、五校の合唱を聴いたと思うが、校内の合唱祭で勝ち抜いた二クラスが合同という参加が多く、指揮も制服姿の男子生徒がぎこちなく棒を振っていた。どちらかというが無表情に朴訥に唱っているようであった。しかしメッセージ性の強い歌も多かった。「消えた八月」という原爆を扱った歌を聞いたときには、歌声の束の直球を投げつけられることよって、原爆が投下された時の状況が浮かび、凍り付くような感じを憶えた。もちろん姿こそ見えないが指導する先生が背後に存在しているだろう。一方、Mの学区のA中学校はこのところ合唱が盛んらしく、つい先日は校内音楽祭を文化会館で行った。音楽の先生のすばらしい歌声は一度、小学校で聞いて驚いたことがある。A中学校の合唱はとにかくうまく、しかも感動的であった。生徒たちも生き生きとし、指揮をしている先生は服装や動きからしていかにもプロだった。素直に感動したのであるが、しかし頭では、やっぱり指導者次第なんだと納得せざるを得ないのかなあ、教育っていうのは集団催眠なのかなあと、これまた半ば素直にでなく思ったりもした。そう思うとMの小学校の六年生と吹奏楽部員が初めて合唱で舞台上に立ったり、三階席まである大きなホールの最前列に陣取って彼らが座っているのもこの先生の力のように思えてきた。A中学校だけでなくA小学校の親たちも何だか浮き足立ち、A中学校の合唱は地域の親たちの希



望の星のような存在にも思えた。

その夜、Mに「A中学校の合唱どうだった？」と聞くと「すごかったねえー。本当にすごかったけど、でも何がすごいのかよく分からない」という答え。逆に「お母さんは何が一番良かった？」と聞き返され、正直に「『消えた八月』の歌かな」と言うと、「あーおんなじー。私たちって気が合うのかなあ。あれって原爆の歌だよ。聞いていてすごくよく分かった」。要は歌の内容がよく分かるか分からないかというだけなのかもしれない。でも改めてA小学校の子どものお母さんっぽく「A中行ったら、Mもああやって合唱やるんだねえ」と楽しみにしているかのように言うと「私はやりたくない」とそっけなく言われてしまった。それ以上理由は聞かなかったが、そのそっけない答え方では歌の内容がよく分かるか分からないかじゃないなあと思った。

私は私で、何か引っかけを感じたまま過ごしていたので、立ち話の中で機会があるとなんかA中学校の合唱のことを聞いていた。お母さん方の話から察するに、今の音楽の先生が数年前に来た時に、先生は当然、部活動として合唱をやりたかったが、生徒たちは抵抗を示し、「色々あったのよ……」という、詳細は分からないが、様々な先生と生徒の間のバトルがあつたらしい。でもなんとしてもあきらめきれない先生は、野球部や他の部活をやりながらも合唱もやろうと声をかけたり、吹奏楽部の生徒たちに何とか合唱もやるように説得したりという過程があつたようだ。そういえば卒業した野球部の生徒のお母さんから、息子が音楽の先生が好きだから合唱もやっているという話を聞



いたことがあったのを思い出す。発声練習や腹筋などかなり厳しく辛い練習らしいが、しかしやっていると確かに声そのものが変わるといふのを生徒たちが実感するようになっていき、楽しくなるようだ。今も部活動として合唱部があるわけがなく、音楽祭に参加したのは選択科目として音楽を選択した生徒であった。その選択科目の音楽は希望者が多くて、ジャンケンに勝たないと選択できないほどらしい。なるほど、まず先生が歌うことが好きで、合唱がやりたいという強い希望を持って動いていた。そして生徒は最初は渋々だったかもしれないが、やっているうちに身体的な技を獲得するという実感をもった。この二つがちょうど良い接点を持っているのが現時点なのだ。プロセス抜きに今の「形」だけを音楽祭で目の当たりにすると、先生の力の大きさがとても強く感じられる。でもそれにしては生徒たちが生き生きしていることがよく理解できなくて私は引っかけを感じていたのだろう。このようなことをあれこれ考えていると、誘導保育を連想してしまう。誘導保育は本来、大人が先に生活を楽しんでいる姿があり、それに子どもが引きつけられて参加していく中で保育をしていくプロセスだったのではないかと私は理解している。それを誘導保育という保育の「形」として見てしまうと、長期間に亘る大がかりな製作などを保育者がお膳立てしているように見えてしまうこともありうる。A 中学校の合唱を「形」として見た私にはそのように見えてしまった。それまでのプロセスの中で先生が自分の楽しいこと、やりたいことを何とか実現しようとすることに引きつけられ、参加していく中で、子どもたちが技を身につけていったという点に



重きを置くと、その教育の力に納得がいく。

Mの話に戻るが、Mはこのところとても歯がゆい思いをしているように見える。地域の教育力というのが重視されて、学校・家庭・地域の連携で色々な催し物が計画される機会が増えていく。舞台は学校だ。「何で日曜日なのに学校に行かなきゃならないのー」とブツブツ言いながら行く。行った先では、親や地域の人たちがボランティアで子どもたちを遊ばせてくれる。遊ばせてくれてはいるけれど、結局人数が多くなれば統制をせざるを得ない事態も当然生じるし、学校に行っているのと気分的には変わりのない休日なのだろう。何の悪気もなく、子どもたちのために休みを返上して大人は尽力してくれる。子どもたちのためにも思っただけでやってくれている。でもそれが子どものいらだちの原因になっていることに大人は気付きにくい。そのいらだちは、大人がお膳立てして、やってくれることそのものにあるのだから。子どもたちは自分たちで何かをやりたいのだ。大人の手が行き届き、やってもらうことに馴れてしまっている今の子どもたちだけれど、でもだからこそ、やってもらうのではなく、自分たちがかかわれることを探し求めてさまよっているように見えるのである。

そういえば、学校でのそういう行事には文句を言いながら参加するくせに、最近では東京湾の三番瀬の護岸掃除に参加したいと言い出した。「自分の部屋が三番瀬状態なんだからそっちを先に片づけければ」と文句の一言も言いたいところだが、私も地域住民として関心があるので一緒に参加した。日曜日の午前中から大人と一緒に空き缶、瓶、



ペットボトルから乾電池や車の部品などをヘッドロだらけになって集めている姿は、お膳立てしてくれて迎えてもらう関係でなく、大人と同じ方向を向いてかわる関係を求めている子どもの象徴的な行動のようにも見えた。

A 中学校の合唱も、M から見れば先生がお膳立てして、自分たちはやらされる立場であるように感じられることに何となく抵抗を示しているのだろうと私は思っている。A 中学校の音楽の先生と地域の教育力として子どもたちに何かをやってあげようとする大人とは、現時点では私の中では全く違う存在になった。しかしM にA 中学校のこれまでのプロセスを説明したところで、大人の理屈になるので意味がないだろう。本人が出会ったところで考えていけばよいのだ。

教育というと、つい大人は子どもに向かい合って何かを提供することのように思いがちだ。でも子どものためという目的を持たずに先に生活する、先に必要なことをしたり、楽しんだり、問題意識を持って行動したりする様々な姿をそのまま見せてしまうこと。それに子どもが自ら引き込まれていき、同じ方向を向いてかわることも教育であり、これが希薄になっていくのが現代のようだ。子どもたちのためという前提で、子どもたちに向かって力を使うのではなく、先に生活する姿を見せて欲しい、そこに引き込まれていきたいんだという子どもの思いに、私たち大人はどこまで気付いているのだろうか。

(お茶の水女子大学)



目をこらして



休みの土曜日。五歳になる娘が保育園を見に行こうと言いつ出した。友達が遊んでいるのをちょっと見てきたいのだと言う。

図書館に行くついでに、保育園の門まで行ってみる。中をのぞくと、ちょうどお昼ご飯の用意をしているところでみんなとても忙しそう。恥ずかしがり屋の娘が小さい声で「おーい」と呼んでも誰も気がつかない。

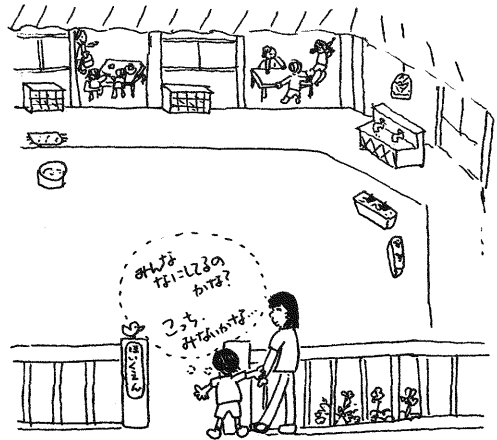
しばらくして「今忙しいのよ。もう行こう」と私が生をかけて、残念そうな顔をしていた娘が「ちょっと待って」と言った。そして門のところから少し中に入り

地面に指で（かずほ）と書いた。そして「もうちょっと早く来てみればよかったよね」と言いながら図書館へと駆け出していった。

地面に残った（かずほ）の文字。たぶん誰にも読まれることのないその文字には、私はここに来たのよという思いがしっかり込められている。その思いを文字に残したことで、娘は満足し駆け出していったように私には思えた。



門の近くの地面に、自分の名前をかく...



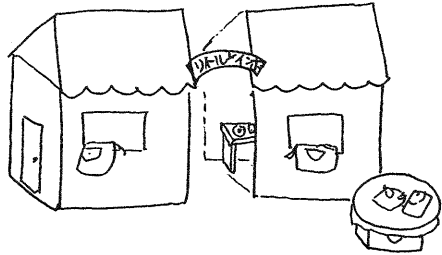
私はしばらく地面に残った文字を見つめていた。

こんな風に、子どもたちはいろんな印を残しながら今を生活しているのではないだろうかという思いが、ふいに浮かんできた。



耳をすまして

絵と文 / 宮里 曉美



自分の決めた場所に。
自分の大切なエプロンを かけている。

子どもの残した文字から、子どもたちの残した遊び場から、いろいろな声が聞こえてくる。いろいろな思いが伝わってくる。子どもの情景が見えてくる。
耳をすまして目をこらしてそっと触って匂いを嗅いで、そしてゆっくり考えてみたい。
家庭と職場と両方で、子どもといえる生活をしながら……。

(目黒区立ふどう幼稚園)

子どもたちの帰った幼稚園（私の職場）の遊戯室で。ダンボールで作った大きなケーキ屋さんの家がある。その窓枠のところにエプロンが並んでかかっていた。明日もまたやるよ、この家の窓ガラスが一番のお気に入りなんだ、ステキでしょ、そんな声が聞こえてくるように思えた。

そういえば……、とさっきまでの遊びの様子が浮かんできた。片づけの時、「私ここにする」「こっちにしよう」とエプロンを持っておしゃべりしていたっけ。





幼稚園誕生の時代

— 関信三の葛藤 —

国吉 栄

連載を始めるにあたって

ものごとはじめは、知られているようで案外知られていないものである。

日本の幼稚園のはじまりについても、たくさん書物が書かれているが、まだ、わかっていないことのほうが、ずっと多いのではないだろうか。

たとえば、日本の幼稚園は、どのような経緯でつくられたのだろうか。イニシアチブをとったのは誰だろうか

か。開国間もない困難な建国の時代に、なぜ幼な子のための新しい教育施設をつくろうとしたのだろうか。なぜ日本の幼稚園は、当時世界で類を見ない国立の幼稚園として出発したのだろうか。最初の幼稚園は本当はどんな保育をしていたのだろうか。草創期の幼稚園はわからないことに満ちている。

今回とりあげる関信三も、幼稚園草創期のなぞのひとつである。

関信三は、明治九年、湯島の東京女子師範学校（現

在のお茶の水女子大学)に幼稚園が付設された時の、最初の園長(当時の職名では監事)である。彼は幼稚園に関する著作を次々に発表するなどして、幼稚園の紹介発展に功績を残した人物であったが、その生涯は長いあいだなぞに包まれていた。のちに明らかにされるところによれば、彼はかつて政府の謀者としてキリスト教阻止のために働き、ついには偽って信仰を告白し、洗礼まで受けた僧侶であったという(注)。

このことを知って、私は関信三という人物に、少なからぬ興味を抱いた。キリスト教諜者という、いわばキリスト教に敵対する思想を持っていたものが、キリ

スト教思想の産物ともいえる幼稚園にどのように出会ったか、またその紹介発展にどのように関わってきたのか。ミスマッチともいえるこの出会いは、関信三にとって、また幼稚園にとって、どのような意味を持っていたのだろうか。

私がこうした関心を抱いたのはもうずいぶん前のことになるが、幸いなことに、この数年、じっくり関信三の研究に取り組むことができた。今回の連載では、その一部を交えながら研究余滴ともいえるべきものを綴って、関信三の生涯と彼が生きた時代、そして日本の幼稚園草創期の姿をラフスケッチしてみたい。

(一) ぶるさとの関信三

安休寺を訪ねて

関信三のふるさととは、三河国幡豆郡一色村、現在の

愛知県幡豆郡一色町である。一色町は、知多湾にのぞむ矢作川河口の農漁中心の町で、古くは海上交通の要地として栄えた港町であった。

関信三は、天保十四（一八四三）年の正月二十日、一色町の真宗東本願寺派安休寺に、第二十二世雲英^{キョウ}元了の五男一女の末子として生まれた。彼が生まれたとき父はすでに亡く、十二歳離れた長兄が父の跡を継いで安休寺二十三世となっていた。

私が初めて一色町を訪れたのは、十数年前、日本保育学会が知多半島の日本福祉大学で開かれた時のことである。その途上、同窓の先輩の先生方の後について、関信三の生家である安休寺を一色町にお訪ねした。

案内してくださったのは、安休寺第二十八世雲英元寿氏と、郷土史研究家杉浦廉平氏であった。杉浦氏は『一色町誌』（一色町誌編纂委員会 昭和45）の関信三の項を執筆された方である。『一色町誌』の記述はごく短いものではあるが、内容の信頼性は極めて高い。

それ以前から興味を抱いていたものの、将来関信三

について書くことになろうとは思いません、今から思えば、なんとせいたくな時を無為に過ごしたものかと思ふ。今ならお尋ねしたいことが山のようにあったのに、その時は、ただ交わされているお話を聞いているだけだった。それでもこの時の安休寺訪問は、私の関信三研究の原点にある忘れがたい思い出となった。ひなびた町のたたずまいと、ポカーンと明るい、いかにも大洋が近いことを思わせる開けた視界が印象的だった。

お話のあと、住職夫人は私どもを本堂裏手の墓地に案内してくださった。ここは子ども頃の関信三の遊び場でもあったらうと思うと、静かな墓地が親しいものに感じられた。仏教に不案内な私にはそれがどの寺院の墓地にも見られる形なのか、真宗独特のものなのか判断できなかったが、古い墓石がたくさんかたまっているあたりには、石の角柱の上に丸い石がのって、その上に四角垂の石を置いた墓が多くあっておもしろかった。それらのどれもが、長い間の風雨によって角

がとれ丸みを帯びていた。

「恩物のようだ」と私は思った。幕末動乱期に生き、思いもかけない生涯の果てに、関信三は幼稚園に出会う。彼はその時初めて目にしたためずらしい遊具に「恩物」という名を与えたが、それらの遊具のなかに、なつかしい何かを感じたのではないか。生家の墓地をめぐりながら、私はそんなことを考えていた。

しかし、関信三自身の墓所は、ふるさととの寺にはなく、東京、谷中の宗善寺にある。彼の墓碑は、彼の死を悼んだ教え子たちによって建立されたもので、フレールベルの墓と同じ形、立方体と円柱と球からなる第二恩物を模して作られている。古い『幼児の教育』に掲載された教え子の手記をたよりに、津守真氏が谷中の宗善寺に関信三の墓碑を捜し出したのは、今からおよそ四十年前のことである。

今彼の墓碑は、本堂の裏手にひっそりと立っている。恩物を模した墓碑のわきには、関信三の生涯の軌跡を知った遺族の手によって、昭和五十三年に石碑が

建てられた。

ふるさとの関信三伝

関信三のふるさとは、もうすっかり忘れられてしまった小さな関信三伝が残っていた。小菅廉編纂『尾参精華』（秀文社 明治32）に掲載された「関新吾」と題する。五百字足らずの、郷土の偉人顕彰的人物伝である。そこに記された「秀才―洋行―幼稚園開設の祖」という文脈からは、彼の秘められた過去に関わる一切がスッポリ抜け落ちている。それは書き手の故意ではなく、知らなかつたためであろう。これが、郷里で生きつづけた関信三伝であった。

関信三の過去、特に彼がキリスト教の洗礼を受けた、という「事実」は、たとえそれがキリスト教探索



のための手段であつたとしても、故郷ではとうてい受け入れられないものだったと思われる。

明治四年春、一色町の近くで数千の農民門徒を巻き込む一大騒動があつた。当時、新政府はキリスト教を禁じていたばかりでなく、仏教に対しても厳しい締めつけ政策をとつていた。ある日のこと、真宗寺院の存亡の危機に直面した僧侶たちが血誓書を懐に役所に抗議に向かつた。ところが、これを聞きつけた周辺の農民門徒たちが、「大勢の坊さんたちがヤソ退治にゆかれるから、われらもお助けにいこう」と次々に竹槍をもつて集まつてきたという。これがついには暴徒と化し、役人ひとりを殺害するに至る。「門徒たちはその首を切り落として、「それヤソの首だ」、「ヤソを討ち取つた」と高く掲げて寺に持ち込んだ。

この騒動の首謀者として僧侶ひとりが斬首刑、役人殺害の罪で門徒ひとりが絞首刑、逮捕されたもの数百人に及んだという。このあたり一帯を揺るがせた大騒動であつた。

関信三が洗礼を受けたのは、この騒動の翌年、明治五年のことである。どんな事情があつたとしても、ふさとの門徒たちに僧侶の受洗など受け入れられるはずはなかつた。

関信三の生地三河は、いわゆる真宗地帯と呼ばれる地域である。一色町自体、狭い範囲に五十か寺を擁する仏教地帯であるが、その三分の一は真宗の寺院で、その大半を東本願寺派の寺院が占める。しかも彼の兄は、当時真宗の中でも名のある僧侶で、門徒からあがめられる郷土の誇りであつた。兄は、その「事実」を隠さざるをえなかつたし、また、隠し通した。ふるさとが関信三の過去について知るようになるのは、ずっと後になつてのことであつた。

二度目の訪問

二度目に一色町を訪れたのは、平成十年、そろそろ原稿がまとまりかけた頃だつた。その日は梅雨明け前にもかかわらず真夏を思わせる暑さだつた。名古屋電

鉄の西尾駅に、一色町の牧野哲也氏が迎えてくださった。牧野氏の父上堯氏は、昭和の初めに一色町で私立保育園を始めた方であったが、園長室の壁には、関信三の大きな写真が飾ってあったという。倉橋惣三『日本幼稚園史』に掲載されている写真である。関信三は、故郷が生んだ幼児教育の先達として、尊敬されていたのであろうか。

牧野氏は愛知県文化財保護指導委員であり、一色町のとりの西尾市の教育委員会文化振興課の仕事もなさっている地方史研究家であった。西尾市には岩瀬文庫という西尾市が誇る貴重な文庫がある。関信三伝が掲載されていた『尾参精華』は、岩瀬文庫所蔵のもので、そのことを教えてくださったのも牧野氏であった。貴重本を保護するためにコピーが一切許されていないので、牧野氏はわざわざ手書きで写しを作ってくださいました。

牧野氏の車で一色町に向かった。三河一色駅に行く

には吉良吉田を起点とする名鉄三河線があるが、本数が少なく不便とのこと。一色、西尾間を結んでいるバスもあるが、やはり便数は少ない。

一色町のとりの吉良吉田は、吉良上野介の郷である。このあたりはもともと雲母キョウモの産地で、「吉良」の名もそこからきたのではないかと考えられている。安休寺のあたりも古くは吉良の庄に属していた。安休寺の住職は代々、「キラ」を名乗るが、赤穂浪士の討ち入り以後、累を怖れて雲英キョウとしたという話も伝えられている。

杉浦家の駐車場に車を置かせていただいて、安休寺に伺う。

住職夫人は、私がお訪ねした者のひとりであることを、かすかに覚えておいでだった。住職二十八



世雲英元寿氏は、「あの人は早くにここから出ちゃつて、キリスト教の方に行つたからわかりません」とおっしゃつたが、一方で、「兄はのろまだけど、弟はしっかりしていた」、「兄は因妙院になつたが、弟ならもつと偉くなつただろう」と古老が語っているのを何度も聞いたことがあると話してくださつた。

お話を伺いながら、故郷を捨てて別の世界に旅立つた者に対する屈折した感情が、故郷には今なお流れていることを感じた。穏やかな口調で話してくださるどつしりとした体軀の元寿氏は、『一色町誌』に載つていた関信三の兄、晃耀コウヨウの肖像と大変よく似ておられた。外の暑さが嘘のような庫裡は明治期に建て替えられたもので、関信三の頃のものではないという。けれども、長押に掲げられている、元寿氏がご自分で表装なさつたという晃耀の立派な書と、晃耀に似ておられる元寿氏を前にしていると、関信三の生家にいることが実感された。晃耀の書には「高倉学寮第二十世講師晃耀」と署名されていた。兄の名は、この地では今な

お高く尊い。

「Ishiki」

安休寺でお話をうかがっているところに、故杉浦廉平氏夫人みち子氏がおいでになつた。「私のところに置いてほこりにしておくより、あなたに差し上げたい」と持つてきてくださったのは、一枚の古い板であつた。勢いのある墨跡はどうやら「Ishiki」と読める。署名は「信三関」。なんと、洋行直後の関信三の揮毫であつた。

英文字で書かれたふるさとの名と、「信三関」の署名。己の過去を封印し、「洋行帰りの関信三」として彼はふるさとに帰り、ふるさともまた彼を受け入れた。故郷に帰れた喜びと晴れがましさと、しかし一方では過去も含めたそのままの存在としては帰れなかつた関信三の苦さが表れている揮毫である。みち子氏のご厚情に感謝するとともに、ふるさとでこの書を書いた関信三の胸中に思いを馳せずにはいられなかつた。

おそらくこれが彼が故郷に残した唯一の存在証明であり、また故郷との決別の証だったのではないだろうか。

一色町からの帰途、私は片時もこの板を手放さなかった。大きな古い板を大事そうに抱えて歩いている姿は、おそらく奇妙なものであつたらう。けれどもそんなことは気にもならず、生きている歴史に直接触れているようで、うれしくてどきどきしていた。その感覚を今も思い出す。

関信三の揮毫は、今、わが家の居間のかもいの上にある。いずれしかるべきところに寄贈するつもりであるが、関信三研究が完成するまで、関信三の書を見ながら執筆するという、思いもかけない幸いを得たことを感謝している。

次回は、ふるさと一色を旅立った関信三が、幕府崩壊後の動乱期をどのように生きたかについて書いてみたい。

注

関信三の過去について最初に伝えたのは、大正十年十一月十日付の「福音新報」というキリスト教界の新聞であった。

のちにその事実は横浜市史の教会の稿に取り入れられ（昭和7）、それを読んだ倉橋惣三らによって『日本幼稚園史』（昭和9）に紹介されることになり、保育史に興味を持つものとの共通知識となるに至った。

しかし、これまでこの興味深い人物を正面から扱った研究は驚くほど少なく、保育研究の分野では、久しく、津守真氏の関信三研究（津守真「関信三の幼稚園紹介」／『幼児の教育』第61巻2号、昭和37 および「関信三の生地を訪う」『文明開化と幼稚園紹介』補遺）／『幼児の教育』第67巻8号（昭和43年）がほとんど唯一のものであった。

また最近になって、立浪澄子氏によって「猶龍—安藤劉太郎—関信三の軌跡」が日本保育学会（平成4）において発表されている。

幼児のコミュニケーション

―保育の現場から考える(2)―

田中三保子

最近、「むかついた」、「きれた」という表現をよく耳にするようになりました。自分のなかのためこんだ感情を外に出せなくなつて、ぎりぎりのところでついに爆発してしまうような状態をさすのでしょうか。どちらももとは気持ちや感情を言いあらわすことばではありませんでした。消化しきれないものが胃のあたりに停滞することによっておこる不快な身体的感

覚、ものともとのつながりが物理的に断たれた状態をしめす語句であつたと思うのですが、いまそれが気持ちやあらわす表現として頻繁に使われているのは、人と人が適切にコミュニケーションをとることが難しくなっていることを、端的に示しているような気がします。

コミュニケーションの方法は、人が初めから身につ

けてくるわけではありません。この世に生まれてからまわりの人々とのかわりを通して学びとっていくものなのです。

ある手段、方法で自分を表現したとき、相手からある反応が返されます（反応が返らないことも含みます）。自分が表現したかったことが相手にきちんと伝わったと体験されたとき、そのとき使われた方法は有効とされて、その人のコミュニケーションのしかたとして学びとられ、身につけていきます。反対に、自分にとってつらい、自分をおびやかすような反応が返ってきたときには、その手段は意味のないもの、使わない方がよいものとして抑えこまれていきます。相手の反応が一定しないとき、たとえば、同じように表現しても相手の感情によって受け入れられたり拒否されたりするようなときには、適切な手段を学びとることができなくなってしまうだけにとどまらず、コミュニケーションをとること自体に怯えてしまうこともある

でしょう。そうした方法や手段は一度で学習されることもあれば、何度も繰り返された結果であることもあります。

幼稚園に入園してきたとき、子どもたちは、すでに彼ら彼女らなりのコミュニケーションの方法を身にかけてきています。その固有の方法で自分を表現し、まわりとかかわろうとします（表現しない・できない、かかわらない・かかわれないはあいも含みます）。そして、幼稚園という社会のなかで、その方法を修正したり、補強したりしていきます。三歳児のばあいの、具体的なようすについては、昨年度のクラスの子どもたちを例にとつて、前回述べました。今回は、「コミュニケーション」の視点から保育について考えてみようと思います。



G夫のコミュニケーション

今年度、私は昨年に引き続き三歳児を担任するとい
う、保育者として初めての体験をしました。そしてや
はり、適切なコミュニケーションの方法を知らない子
どもたちが多いという印象を改めてもちました。

このクラスには、以前から遊具として木製の汽車と
レールのセットがあるのですが、今年度の子どもたち
には格別に人気がありました。とくに男の子のばあ
い、そばに寄らない子が一人いたのを除いて、みんな
が興味を示しました。汽車の台数は家庭で使うよりは
ずっと多いのですが、それでも遊びたい人全員がある
程度満足するには十分とはいえず、連日のように衝突
が起こりました。

G夫は朝一番に来ることが多く、すぐに汽車の入っ
たかごを持ってきて、床に並べ始めます。あとから来
た子どもたちが寄っていくと、G夫は自分の遊びを
じまされれると思うのでしょうか、手を広げ身体で防ご

うとします。そして、「きーっ」と、それこそ部屋中
に響き渡るような甲高い声を出し続けます。その声に
まわりがひるむと、まるでなにごともしなかつたかのよ
うに自分の遊びを続けます。ときに、ひるまずに汽車
を取ろうとする子がいると、相手をたたいたりレール
を投げたりして、そうした行為を止められると、大き
な声で泣き続けます。泣きやむまでにはかなりの時間
が必要です。

G夫はまた、自分が遊びを始めた場所からほとんど
動きません。そこに座ったまま、用があると相手に向
かって大声を出します。「ちょっと、してよ」。私も
たびたびそう呼ばれました。汽車を動かしていても、
その場所からめいっばい手を伸ばして行って、手が届
かなくなるとやっと居場所を移動し、また同じように
手を伸ばしていきます。汽車と一緒に少しずつからだ
も移動していく他の子どもたちとは、ぶつかってしま
うことになります。G夫が座って遊んでいる格好は、
まるでお座りができるようになつたばかりの乳児のよ

うで、最初、私はもしかしたら彼の運動機能が未成熟なのではないかと思ってしまったほどです。

自分は動かないで相手が自分に合わせてくれるように行動するのが、G夫が学びとってきたコミュニケーションの方法なのでしよう。一人っ子で母親ともそういうかかわりかたをしてきたようでした。私は、G夫には、奇声を用いてではなくもつと穏やかに自分を表現してもらいたいし、そういう方法があることを伝えていきたい、相手に自分をきちんと伝えるには相手と向き合うことが大切であると伝えたい、と思いますた。

H夫のコミュニケーション

もう一人、汽車での遊びのなかで、大声を出すというしかたで自己主張するのが、H夫です。初めの頃、彼は隣のクラスの仲良しと外遊びをして過ごしていましたが、だんだんへやにもどってくる時間が早くなりました。帰ってくるのとたいいてい、汽車遊びのそばに

寄っていきます。そして、たぶんなんの声も発しないまま、いつの間にか汽車を走らせているのです。どうやらじつとようすを見ていて、さりげなくさつと手を出して持つていくらしいのです。持つていかれた方もなんだかわけがわからなくて、結局そのままになつてしまうようでした。実は、私にも、いつどうやってH夫が汽車を調達するのかずつとわからなかったほどなのです。そのうち、怒つて、はむかう子もでてきました。H夫は身体は小さいのですが、反応の素早さには目を見張るものがあります。ほんのわずかのあいだにつかみあいになっていて、相手の泣き声にあわてて止めにはいることもたびたびでした。そんなとき、私が相手に気をとられていると、さつとかけだして出ていつてしまいます。何かを伝えるいとまもありません。

H夫は電車がとても好きなようです。穏やかに遊んでいるときは、駅のアナウンスを真似たりして実に楽しそうです。でも、自分のイメージ通りにやれなくな

ると大変です。「ぼくが行くの。どいてよ、じゃま」。
びっくりするような大声で威圧的に言い放ちます。言
いながら、レールから他の子の電車を手で払いのけて
しまうのです。非常に強い調子の、抗弁できないよう
なものの言いかたです。そして、H夫はそのまま相手
の反応にはお構いなしに遊び続けるのですが、保育者
が彼のそばへ行こうとすると、ぱっとへやから逃げ出
してしまいます。ときどき、ずいぶんあとになって、
「さつきはごめんね」と相手に言っているのを耳にす
ることもあるのですが。

H夫は姉とは仲がよいけれど、けんかもよくするよ
うです。母親は、よほど激しいけんかでない限り、当
人同士に任せていると言っていました。彼が姉との間
で自分なりに学んできたコミュニケーションの方法
が、たとえば威圧的な言いかた、ほしいものはことば
を通してではなく隙をみて手に入れる、怒られそうに
なったらまず逃げてあとで謝る、などだったのではな
いでしょうか。

私は、H夫にも、何
よりも自分の気持ちや
意図を率直に伝えられ
るようになってほしい
と願いました。



H夫は自分を中心になって遊んでいるときには、
「ああしたい、こうしたい」ととてもよくしゃべりま
す。けれども、他の子どもたちの遊びに入りたくい
思っているようなときには、ほとんど何も言えなく
なってしまいます。まわりで、うつむき加減に、時
には指しゃぶりをしながら遊びを見えています。私には
彼の気持ちが痛いほどわかるのですが、三歳児にはそ
れでは伝わっていきません。「Hちゃんが入れてほし
いって」。「Hちゃんも使いたいから貸してくれる」。
H夫の目の前で、ことばだけでなく、ものの貸し借り
も含めたやりとりを幾度も繰り返しましたが、自分で
言えるようにはなかなかなりませんでした。

十一月のある日、外から戻ったH夫は、汽車で遊ん

でいる子どもたちのまわりにしゃがみこみ、ようすを見ていました。I子がさつきまで使っていた汽車が三台、レールのそばに放置されています。H夫がそれに手を出そうとしたので、「それ、Iちゃんが使つていたけど、もう使つてないみたいだからきいてみたら」と声をかけてみました。H夫は自分で探さずに「Iちゃん、どこ」と聞いてきます。「あそこ、たこやきやさん」。H夫は相手が女の子だったせいもあつたのでしょうか、すぐにI子のところに行きました。「Iちゃん、使つてるよね」。I子の返事は「使つてないでしたから、H夫はすぐに汽車のところにはき返していききました。

私はH夫のききかたにひっかかりを感じました。ふつうには「使つてる?」ときくと思うのですが、彼はそうは言えないようなのです。相手に対して対等に向き合つて自分の意志を伝えられないのでしょうか、相手の気持ちを察し、相手の機嫌をそこねないように気を使いながら自分を表現しているように思えるのです。

「使つてる?」という言いまわしそのものをH夫が知らないはずはないでしょう。その言いかたにこめられる気持ち自体が今の彼の心持ちとはそぐわなくて、使うことができずにいるような気がします。「入れて」「貸して」と言えないのも、ことばの問題ではなく、優位に立っていないければ相手と向き合うことができない今のH夫の状態をあらわしているものと考えられます。

保育とコミュニケーション

コミュニケーションの方法が気持ちをあらわすものだとしたら、違うやりかたを習得して使えるようになれば、気持ちも変わってくるのではないのでしょうか。たとえば、H夫のばあいにも、「使つてるよね」のような屈折したききかたではなく、もっと率直にきいたときに、自分をしっかり受け止めてもらえたという体験が重なれば、素直に人に向き合えるようになると思うのです。幼児だからといっても、今までの体験か

ら自分なりに学びとってきたことは、そんなに簡単に
変えられるものではありません。とくにH夫がすでに
獲得してきたコミュニケーションのしかたは、かなり
強固に身につけてしまっているようです。いまさら他
の方法といわれても、変えるのは難しそうです。私と
しては、たとえば、H夫が自分で言えないでいること
をかわりに相手に伝えることで、彼の気持ちそのもの
は受け止めつつ、もつと穏やかな伝えかたがあるこ
と、相手の気持ちをどう感じとつたらいいかななどを目
の前で示すようにしてきました。また、相手の子ども
との実際のやりとりのなから、どんなときに相手が
素直に感じてくれるか体験的にわかってもらえるよう
にもしてきたつもりです。

H夫としては受け入れてもらえると思っていないかっ
たことも、きちんと伝えれば受けてもらえる体験が少
しずつ重なったのでしょうか、彼は今、大きな声を出
すことはしなくなりました。「いれて」などはまだ自
分では言えないので、私に橋渡しを頼んできますが、

それが今のH夫なりの素直な表現のしかたなのだと思
解しています。

子どもが素直に自分の気持ちをあらわせないでいる
としても、その子はその子なりになかを表現してい
ます。とくに自然でない行動をとるときは、なかを
強く訴えようとしていることが多いと判断してまちは
いないようです。子どもの行動の裏に隠されている実
はいちばん伝えたい気持ちを推しはかって、目下の行動
ではなく、今の気持ちに素直に伝えることを繰り返し
ていくと、子どもは、まわりくどい表現をとらなくて
も、むしろ、気持ちそのままに表現した方がわかって
もらえるし、心地よいことを感じとつてくれるようにな
ります。適切なコミュニケーションの方法を学ぶこ
とは、スキルとしての方法を習得するだけにとどまら
ず、人と人とが素直に向き合ってお互いを生かし支え
合う関係を学んでいくことと思うのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

比企の畑から・春

小宮山 洋夫

一昨年、埼玉県比企郡の鳩山町に仕事場を移し、畑を借りた。秩父山塊が東におわり、関東平野に移行する境界に、ヘソのように突き出た丘陵地に、鳩山の町は広がっている。

畑は、幸運にも、隣人の案内で、すぐ見つかった。丘の上にある畑の周辺には、集落が点在し、

その背後に、秩父の山並みが横たわっている。畑の近くに、古代、国分寺の瓦を焼いた窯跡がある。風景はしかし、古代から、弥生を突き抜けて、縄文の面影が濃い。

仕事場から畑へは、自転車で十分ほどの道の



ホトケノザ

り。住宅地を抜けると、ほどなく雑木林がつづく地域に入る。昨年、その畑への道路でタヌキの死体に出会った。自動車にひかれたらしい。今年も見た。車が何ほどのものか、彼らは知らない。生活領域が、人間と重なると、悲劇が起こってしま

う。
そんな日本の原風景の中で、久しぶりに、大地を動かす。土の抵抗感がうれしい。

初年度の野菜の出来は、あまりよくなかった。それで、肥料について、多少の修正を考えた。しかし、思いとどまった。

二年目、めざましい生育振りを見せるようになった。方法の基本を変えなくてよかった。

「お上手ですね」

「いやー」

通りかかったおばあさんが、声をかけてくれ

た。

「ここは、野方だから」

「えっ、野方って、何ですか」

「痩せている畑ということ」

「はあ」

「イモは、よく育つけれどね」

そういえば、東京の中野に、野方という地名があったな、そうか、野方にはそういう意味があったのか。

「じゃあ、肥えた畑は、どこに」

「下の田んぼの側の畑」

確かに、田んぼに近い低地の畑は、水分、養分に恵まれ、菜っ葉類、ナス、キュウリなど、大半の野菜はよく育つ。他方、水はけのよい台地の畑は、イモ類、カボチャ、ラッカセイなどが、つく



コマツナ

りやすい。

どうやら、わが菜園では、どの野菜も、まずまずの出来なので、おほめの言葉にあずかったようだ。

早春の畑。

コマツナ、ホウレンソウ、シユンギクが、双葉を開き、その間から本葉が、顔を見せている。ネギが針のような芽を伸ばしている。

ジャガイモの芽が地上に姿を見せた。その傍らに、ハコベが白い花を咲かせている。

「ホーホケキョ」

「ホーホケキョ」

畑の南斜面は、

アズマネザサでおおわれている。その茂みの中で、ウ



ジャガイモの芽生え

グイスが鳴いている。絶え間なく、鳴く。

時折、

「ケ、ケ、ケ」とキジの鳴き声も、入り交じる。竹ヤブに、二組のキジの家族が暮らしているという。

隣人は、ほくに語った。

ヤブから家族が畑に出るとき、まず、雄（父親）が先に出て、あたりを見回す。次いで雌（母親）が子どもを連れ、姿を現す。

「雄は、一足早く身をさらし、注意を自分に引きつけることで、家族の安全を図っているようですよ」

どうやら、あの雄の身体の裝飾は、求愛のためだけではないようだ。キジのお父さんは偉い。キジはイモを掘って食べるといふ。ほくは、残念ながら、まだ、雌が一羽歩く姿しか見ていない。

春が深まると、コマツナ、ホウレンソウの収穫

が、忙しくなる。昨秋、こぼれ落ちたシソの種が、勝手に芽を出す。全く、シソは世話なしだ。カボチャが大きく厚い双葉を開く。



カボチャ

初期の生長のため

の栄養が、たっぷりつまっている、大切な双葉。

トウモロコシ、地這えキュウリ、エダマメの種をまく。

越冬した菜っ葉がとう立ちして、黄色い花をつけた。「菜の花畑の誕生」。その周辺に、スズメノエンドウが、赤紫のチョウウ形花を、オオイヌノフグリは、美しい青紫の花を咲かせている。

気温の上昇に呼応して、ニラ、ワケギが、盛ん

に葉を茂らす。フキが葉を大きく掀げる。ネギが坊主をつけた。その株元を守るように、ナズナが花を開き、スズメノカタビラが、穂をつけている。



オオイヌノフグリ

冬の間、眠っていたタマネギが眼をさまし、背丈を伸ばす。秋、種をまいたサヤエンドウが花を咲かせ、実をつける。

鳩山には、「赤沼」「泉井」「小用」「須江」「奥田」「高野倉」など、古い村の地名が、地域名として残されていて、多くの想像力を刺激する。

わが菜園は「赤沼」にある。赤沼からは、ヤマタノオロチをイメージしてしまう。オロチとは大蛇のことだ。オロチは原自然のシンボルである。人間は、オロチを退治して、変容させ、文化をくくり上げてきた。

オロチといえは、当地で何匹ものへびに遭遇している。雑木林や小山を散歩すると、山道を横切るへびによく出会う。

対面すると、一瞬、こちらの身体がこわばる。しかし、彼らは蛇行しながら、ゆっくりと逃げ去る。そのしなやかな動きを眺めると、畏怖の念を覚えずにはいられない。

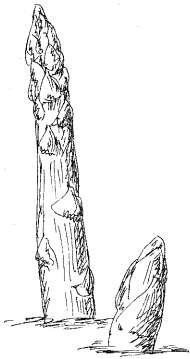
「まだ、自然は残されている」

「へびに会えるかぎり、まだ、大丈夫」

ほくは、思わず、つぶやく。

晩春、地中から、アスパラガスが、芽を出す。

シュンギク、ホウレンソウの収穫がおわると、オ



アスパラガス

クラ、ニガウリの種まき。

園芸店に、ナス、トマト、ピーマン、トウガラシ、スイカなどの苗が、出回る時期を迎える。トウモロコシ、地這えキュウリ、エダマメが、芽を出す。

ヨモギが畔道を一面おとした。スズメノカタビラ、オオイヌノフグリ、カラスノエンドウが、畑寄りの畦道に、入り交じって生育している。

そろそろ、ヨモギを摘む人の姿が見られるだろう。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者

「観察」徒然草

砂上 史子

私は現在、保育についての研究の一環として、保育の現場での観察を継続的に行っています。今回は、私が大学院に入学して以来約二年半にわたる幼稚園での観察を通じて感じたことを素朴に、思いつくままに、徒然なるままにお話ししてみたいと思います。

中間者として

研究のための観察という目的で保育の実践が行われ

ている場に臨むということは、私は保育をするわけではないので、当然私の立場は「実践者」|| 「当事者」ではなく、「研究者」|| 「第三者」ということになります。けれど、観察をしているときには、私はたとえ保育者ではなくても出来る限りその場の当事者でありたいと思って観察しています。なぜなら、そうしないと、保育のなかで起こっていることをちゃんと理解できないように思うからです。保育に限らず実践という

のは、そこにかかわる人すべてが当事者であるものだと思います。ですから、自分を「壁」にするように第三者的視点から保育を見ていたのでは、そうした観察を基にした研究は、たとえ論文としては綺麗にまともだったとしても、どこか当事者の実感の欠けた実践とのつながりが希薄なものになってしまうように思われます。

そうした自分の観察スタイルもあって、幼稚園で観察しているときには、私はお片付けのときに子どもと一緒に遊具を片付けたり、お弁当のときにテーブルを出したりと、ところどころでちょっとしたお手伝いをすることがあります。それは、意識的に「やろうと思っただけ」というよりも、無意識的に「ついつい体が動いてしまう」という感覚に近いように思います。おそらく、自分もまた保育の現場の当事者だという姿勢で観察していると、そこで起きていることに対して第三者的に距離を置くことができなくて、そうなるってしまうのだと思います。

けれど、それでも、私は子ども達にとってはやはり保育者の先生（以下、先生）ではなく、あくまで「先生じゃないけど、誰かのお母さんでもない、いつも何かを書いたりビデオを撮ったりしているお姉さん」という存在です。ですから、観察における私の存在というのは実践者（当事者）と研究者（第三者）の間にいる「中間者」であるように思います。

この「中間者」というあり方は、観察を始めた頃には子ども達に「何してるの？」とか「遊ばないの？」とか聞かれるたびに、実践者でも研究者でもないどっちつかずな存在である自分を思い知らされる感じがして、ちょっと居心地の悪い感じもありました。けれど、観察が続くにつれて、子ども達の方で「このお姉さんはそういうものなんだ」と納得してくれていったように思います。例えば、先日の観察のなかで、私の目の前で男の子同士がかなり激しく叩き合うケンカを始めたときに、私は咄嗟にそのケンカを止めに入りました。私は普段先生がやっているように、まずは男の

子達に「どうしたの？」と双方の言い分を聞き始めました。けれど、表面上は先生っぽく落ち着いた感じを装っていたのですが、男の子達のカーアツと興奮して泣き出している雰囲気は私自身も呑まれて、私は内心「ああ、どうしよう、どうしよう」と焦っていました。すると、その場にいた女の子が「先生、呼んでく」と先生を呼びに廊下へ走っていきました。

そのときに私は、私自身が現場での自分の中途半端なあり方を悩まなくても、子どもの方で私が保育者としては役不足だということをよく分かってくれているのだなあ……(苦笑)ということがよく分かりました。ですから今では、「このお姉さんはそ・う・い・う・もの」として子どもに受け入れてもらっているように感じて、自分の「中間者」という観察スタイルも一つの観察のあり方なのではないかと思えるようになりました。

からだの感じに気づくこと

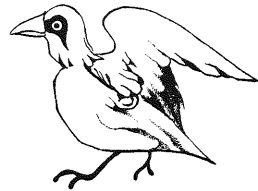
私の研究テーマは「保育における身体性」というも

ので、保育の実践のなかでは保育者と子どもの身体のあり方が非常に重要ではないかという問題意識に基づいて研究を進めています。ですから、

実践の場で観察するということは、観察者自身、つまり私自身の身体のあり方も含め

て、保育の実践にかかわる身体性に気づく経験でもあります。

観察を始めた頃のビデオ記録のなかに、私が先生や子ども達と話している声が入っている場面があるので、その場面を見ると(聞くと)、すごく上ずった妙に甘い声を出している自分に気づかされます。おそらく、観察当初はまだ先生や子ども達に対して必要以上に気を遣ったり緊張している部分があつて、そうした「よそ行きの声」になっていたのだと思います。けれど、観察が進んでいくにつれて、先生や子ども達と



話す私の声はだんだんと普段の地声に近くなっていき
ました。きつと、観察を重ねるなかで、先生や子ども
達との関係も深まり、私自身が現場に馴染んでいった
ということが、そうした声の変化に現れているのだと
思います。

また、観察のなかで自分の身体のあり方に気づくこ
とは、保育者ではない自分と保育者である先生との身
体のあり方の違いに気づくことでもあります。

ある日、私が観察しているクラスで、先生と子ども
かみinander一緒に「はないちもんめ」をしたことがあ
りました。そのとき、そのクラスにはいつも保育者の
先生がお二人いらつしやるのですが、たまたま一人の
先生が何かの用事でいらつしやらなかったので、「砂
上さん、入ってもらっていい？」と先生に言われて、
私が片方のチームに入ることになりました。そして、
「はないちもんめ」が始まって、それぞれのチームが
お互いに「かあーつてうれしい」「まけーてくやしい」
と大きな声で言いながら相手側へズンズンズンと出て

いくとき、私は相手チームの先生がやっていたように
子ども達の真ん中で率先して大きな声を出して前に出
て行ったのですが、そのときに自分の身体の何とも言
えない硬さのようなものを感じました。

多少の気恥ずかしさもありましたが、そういうふう
に多少演技的に大きな声を出すということが、今の自
分の身体の動きのレパートリーにはないものだという
ことを改めて知ったとも言えます。観察のなかで先生
を見ているときには特に何も感じていなかったのです
が、この体験を通して、いざ自分が先生と同じような
ことをするとすると、いかに自分の身体がギクシヤク
してしまうものなのか、いかに保育者ではない私と保
育者である先生の身体が違うものなのかということ
を、私は文字通り身をもつて知ることができました。

このことは、裏返して言えば、保育のなかで先生が
普段当たり前のように行っている身体の動きこそが保
育のエッセンスであるということを示唆しているのだ
と思います。例えば、ある日、ある先生がある男の子

の空き箱のロボット作りを手伝っているときに、先生は男の子がテープを切って空き箱に貼るまで、ずっと重ねた空き箱を手で押さえていました。その間に他の子どもがその先生にいろいろと聞いてきたりして、その都度先生は何か聞いてきた子の方に顔を向けて応えるのですが、手はずっと空き箱の上に置いたままで空き箱から離すことはありませんでした。おそらく、先生自身は無意識的にしていたことだとは思うのですが、先生の顔は他の子に向いていても、ロボット用の空き箱の上に先生の手がずっと置かれていたことで、ロボット作りをしていた男の子は安心してロボット作りを続けられたのではないのでしょうか。観察のなかで、子どもとかかわる先生のこうした身体の動きを見るたびに、そうしたささやかな身体の動きこそが保育を支える大きな要素なのだと感じます。その意味で、先生というのはまさに「身体として保育者なのだ」と気づかされます。

まなざしの厚み

観察のなかでは、保育の様子を観察するだけでなく、毎回の保育後（観察後）や学期末に先生と子どものことについてお話しする機会を持たせてもらっています。保育を観察しているときにもいろいろなことに気づくことができるのですが、それと同じくらいに先生との話し合いもまた、私にとっては非常に学ぶことの多い時間です。話し合いのときに、私は先生と具体的な子どもの姿や保育のことについてお話しするのですが、そのときにいつも気づかされるのは、先生のことどもを語る語り口が持っている独特の「暖かさ」です。

話し合いのなかでは、子どもの姿に感心したり、子どもの育ちを喜んでりするような話題も多いのですが、実際にはそれ以上に育ちのなかでさまざまな課題を抱えている子どもの姿について話すことの方が多いように思います。けれど、そういう話題のときでも、あるいはそういう話題のときにこそ、先生は顔をしか

めるのではなく、ちよつと余裕を持つて、ときには困った子どもの姿についてちよつと微笑みながらお話ししてくれることが多いのです。私は観察をしていて、気になる子どもの姿をちよつと目にただけでも、「ああ、この子のこういうところは、どうなるんだろう？」と心配になるのですが、そういう子どもの姿について先生方とお話ししていると、不思議と「でも、もうちよつと時間をかけて見ていけばいいのかな」と自分の子どもを見る目に余裕が持てるようになります。それは、おそらく、日々保育を行っている先生の子どもに対するまなざしのあり方を私自身も多少共有できるようになるからではないかと思えます。

観察のなかで、子どものちよつとした行動を見て私は先生と笑い合うことがよくあります。子どものちよつとした行動や言葉がとても微笑ましくて思わず笑ってしまう場合も多いのですが、一方で、先生が子どもに注意をしているような場面でも私と先生は一緒に笑ってしまうことがよくあります。そういうのは大

抵、いつも所持品の始末の遅い子が案の定リュックやコップを床に散らかしたままブラブラしていたり、気が強くて友達に対して自分の思いを譲らない子がいつも通りガンとして自分の思いを通そうとしていたり、「直してほしいんだけど、でもそこがその子どもその子らしいところなんだよねえ」という出来事に接した場合は、そういう場合、先生はその子どもに対していつものように「コップとタオル忘れてるよ」などと声をかけるのですが、それと同時に「しようがないなあ（笑）」という感じで私の方を見て苦笑いをするのです。そして、私も先生と一緒にその子どもを見て思わず笑ってしまうのです。本当にそういうときには思わず笑わずにはいられないくらい、その子どもが不思議と可愛らしく思えるのです。もちろん、子どもの行動が度が過ぎたときには、先生は毅然として子どもに向き合います。けれど、そういう場面も含めて、子どもへの笑いに端的に表れているように、先生は基本的に子どもに対してどこかゆとりを持ったま

なごしを向けているように感じます。

何かが「できる／できない」というふうには評価的に子どもを見るならば、育ちの課題を抱えている子どもに対する先生のまなごしは「これができない、あれもできない」というふうにどこか冷たいものになってしまふと思います。けれど、先生のまなごしが単純にそうはならないのは、先生は子どもを見るときに、子どもの姿を評価する以上に、それを味わうような姿勢、つまり鑑賞するような姿勢を持っているからではないかと思えます。それぞれの子どもが抱えている育ちの課題を誰よりも的確に見つめつつも、子どもがその課題を乗り越えることを誰よりも強く願いつつも、それがなかなか乗り越えられないことも含めてその子どもの姿をまるごと受け入れている姿勢がそこにはあるように思います。だからこそ、先生にとっては相変わらずの子どもの姿が「相変わらずなんだけど、どこかいとおしい」と感じられるのではないのでしょうか。そして、「その相変わらずの子どもにかかわっているのは、

他の誰でもない保育者としての私自身だ」という当事者意識と責任感が、先生がそのように子どもの姿をまるごと受け入れる土台になっているのだと思います。

ですから、先生の子どもに対するまなごしは、子どもに対して甘いのではなく、またただ単に暖かいのではなく、「厚み」のあるものだといふふうに感じます。その「厚み」は、保育のさまざまな場面を通して子どもを見ているという「多面的に子どもを見ていること」、子どもと出会ってから今日にいたるまでの「子どもとの歴史を積み重ねていること」に裏付けられた「厚み」なのだと思います。その意味で、保育における子どもの姿をよりよく理解するためには、何よりもそうした先生のまなごしの「厚み」に近づくことが必要なのだと思います。

盛り込むことと切り取ること

私の幼稚園での観察は、保育全体について学ぶというだけでなく、「研究のための事例を集める」という

目的も持っています。ですから、観察から得た事例を元にして研究論文を書くということが、観察の後には待っています。私は昨年の一月に幼稚園での観察で得た事例を元にして修士論文をまとめたのですが、その論文を執筆するなかで私が非常に強く感じたのは、「研究というのは、へ切り取る」作業なのだ」ということです。

論文を書き始める前、私は「幼稚園で縦断的に観察させてもらったおかげで保育や子どものことについて多くのことを知ることができた。論文を書くときには、ぜひ普段の子どもや先生の姿も盛り込んで、普段の保育の様子が生き生きと目に浮かぶような論文にしよう」と意気込んでいました。けれど、いざ論文を書き始めてみると、事例の考察のなかに私が観察を通して知っている子どもや先生の姿をたくさん書きたいとは思っていても、なかなかうまくいきませんでした。もちろん、その背後には私の書く力の弱さもあったと思うのですが、やはり研究というのがあるテーマにつ

いて焦点化するものである以上、カメラで撮影するときには被写体にピントを合わせるとそれ以外のものが背景になってしまうように、自分の研究テーマに沿って事例を考察していくことは、観察で自分が知ったことをどれだけ盛り込むかということ以上にどれだけ切り捨てられるかということに重きが置かれてしまうものである、と感じました。特に、私の研究が注目していたのは、「子どもが他者と同じ動きをすること」というとてもささやかな身体の現象だったために、その現象に研究の焦点を絞ることによって、膨大な観察記録の大半が「背景」になってしまい、論文のなかに十分に生かすきれなかつたように思います。

けれど、それでも、個々の事例の考察にあたっては、私は事例の背後にある文脈（遊びの流れやそこでの子ども同士の関係、それ



らに対する先生の捉え方」を出来るだけ詳しく書くように、「盛り込む」ように努めました。ただ、そのときに私は観察で感じたことを論文に盛り込むことの必要性と同時に、保育のなかの子どもの姿を論文に記述する自分にある種の「無責任さ」のようなものも感じました。例えば、事例での子ども同士の関係を説明するために、私はその事例に登場する子どもについても「緊張感があつて、なかなか自分から動き出せないところがあつた」とか「ちよつと他の子とかみ合わないところがあつた」というふうに、事例が見られた時期の子どもの具体的な姿を記述しました。けれど、そうした記述をする度に、私は、「私はこういうふうに書けば事例の説明が終わるけれど、先生は説明しただけでは終わらないんだよなあ……」と思いました。

同じ一つの子どもの姿について、私の研究は「緊張感があつた」と書いたところで終わりますが、先生の実践は、先生がその「緊張感がある」子どもに対してどうかかわるかというところから始まるのではないで

しょうか。そう考えたとき、研究を行う上で、自分の研究が実践に対してどれだけの、またどのようなつながりを持つのかということや自戒を込めて問うことが研究者にとつては必要なことなのではないかと感じました。もちろん、私の立場はいくら子どもや保育者の先生に寄り添った見方をしたとしてもあくまで研究者なので、そういうふうなことを感じるのは研究者としてはナイーブすぎるのかもしれませんが、それでもやはり、「研究者が終わったところから、実践者は始める」ということをある種の「苦さ」として心に留めておくことは、私がこれから実践との強いつながりを持つような研究、「実践者とともに始まる」ような研究をめざす上でとても大切なことだと感じています。

朝

私は観察をするときには、いつも保育が始まる時間、子ども達がちょうど登園してくる時間から観察を

させてもらっています。私はこの朝の時間がとても好きです。玄関から廊下を一直線に走って保育室に飛び込むようにやってくる子もいれば、家でぐずったのを引きずったままちよつと不機嫌そうにやってくる子もいて、子ども達はさまざまな表情で幼稚園にやってきました。そんな子ども達に対して先生はいつも「おはよう」と明るく親しみを込めて声をかけます——本当にただそれだけの、当たり前過ぎるぐらい当たり前の、毎日繰り返されている光景なのですが、私はそうした子ども達と先生の姿を見るたびに、保育の現場に自分があることをとても嬉しく感じると同時に、私自身が元気づけられるように感じます。

「おはよう」と先生が子どもに声をかけるなかで、先生と子どもは「今日」という昨日でも明日でもない、今ここにある新しい一日のスタートを切っています。「昨日」をひきずっていたり、「明日」に縛られたりすることもあるなかで、それでもまた「今日」という日が新しく仕切り直されるということは、子どもが

行きつ戻りつしながらもそれでも着実に育っていくことを期待することに似ているように感じるのは。おそらく、それは、哲学者のボルノウが、未来へと歩んでいく子どものなかにあるものを「朝のような感情」と名付けたことも通じているのだと思います。だから、子ども達が登園して先生に迎えられるときの文字通りの「朝のような感情」に接するたびに、私は、自分が保育という子どもが育つ現場に立ち会っていることを本当に幸せなことだと感じます。

幼稚園での観察を通して私が感じたことを思いのままに書いてみましたが、私が観察のなかで常に感じていることは何よりも、部外者である私を暖かく迎えてくださっている幼稚園の先生方と子ども達への感謝の気持ちです。この場を借りて改めてお礼を述べさせていただきます。本当にいつもありがとうございます。

(お茶の水女子大学大学院)

編集後記

今月号から新連載が始まります。

国吉先生の「幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤―」は十二回、シリーズ「いま、子どもたちは」の初回は山崖先生に三回書いていただきます。宮里先生、小宮山先生の新企画も始まります。どうぞご期待ください。

*

新聞で、大人の都合で滑り台がいくつかの公園を転々とした、という記事を読みました。その都合とは、「子どもの声がうるさい」というものでした。

それは子どもの喜びそう少し風変わりな滑り台でした。新しい滑り台を珍しがってたくさんの子どもが

やって来て、公園のまわりには一日中歓声が絶えません。その様子は「幼稚園が丸々ひとつやってきたほど」と書かれています。住民の多くは子育てで経験のある年配者だといえます。話し合いを重ね、今の場所に決まりました。「大きな道路が近くを走り、子どもの歓声は車の騒音に消される」。

子どもの声とは、それほどうるさいものなのでしょうか。

そんなとき、同じ新聞のコラム欄にふと目が止まりました。へ霜や氷のきびしい日の子供の声はにぎやかで活気があった。大人はそうした声に励まされて寒さとむき合い立ち働いていたのかもしれない。

引用されていた馬場あき子さんのこの文章に、ほっとする思いがしました。

(A)

幼児の教育

第九十九巻 第四号

(二〇〇四年四月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十二年四月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

☎〇三-三五三九五-一六六一三(営業)

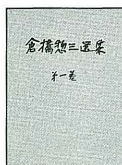
☎〇三-三五三九五-一六六〇四(編集)

振替 〇〇-一九〇-二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

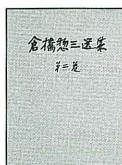
倉橋惣三の保育図書



倉橋惣三選集 第一巻

幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル
わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の代表作「幼稚園真諦」自伝的物語「子供讃歌」それに「フレーベル」を収載しています。

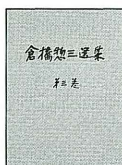
倉橋惣三 著
■20×15cm・412頁 上製本 ケース付 定価：本体3,398円+税



倉橋惣三選集 第二巻

幼稚園雑草
本巻には「幼稚園雑草」が納められ、倉橋の前半生の思想や気持ちを全面にわたって知るのに格好の書。潤いのある、洗練された文章が人の心をとらえます。

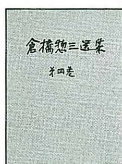
倉橋惣三 著
■20×15cm・448頁 上製本 ケース付 定価：本体3,398円+税



倉橋惣三選集 第三巻

育ての心・就学前の教育 他
倉橋の主著の中でも最も親しまれ、広く読まれている「育ての心」と、彼の著作としては異色な、理論的体系的に書かれた「就学前の教育」他を収載しています。

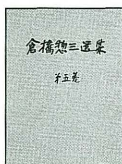
倉橋惣三 著
■20×15cm・470頁 上製本 ケース付 定価：本体3,500円+税



倉橋惣三選集 第四巻

保育案 他
カリキュラムをたてるにあたり、保育者なら必ず目を通しておかなければならない「保育案」をメインに、エッセイや「作詞・書簡・揮毫」等をまとめました。

倉橋惣三 著
■20×15cm・456頁 上製本 ケース付 定価：本体3,398円+税



倉橋惣三選集 第五巻

児童教育・教師論・児童文化 他
幼児教育に関連する「児童教育」「発達心理学」「教師論」「家庭教育」「児童文化」そして、随想、絵本など、現代につながる倉橋の全体像が把握できる1冊です。

倉橋惣三 著
■20×15cm・512頁 上製本 ケース付 定価：本体3,398円+税



幼稚園真諦

フレーベル新書⑩

幼児教育の方法について述べた「保育法の実践」、保育案の具体的な立案の仕方を表した「保育案の実践」、一日の保育の流れを綴った「保育過程の実践」で構成。

倉橋惣三 著
■18×12cm・136頁 定価：本体650円+税



子供讃歌

フレーベル新書⑪

倉橋のユニークな自伝。子どもに対する比類なく美しい讃歌を捧げた書。戦後の混乱した幼児教育界に、本当に変わらない基本的な考え方を示そうとした書。

倉橋惣三 著
■18×12cm・188頁 定価：本体806円+税



育ての心 (上)

フレーベル新書⑫

「自ら育つものを、育てようとする心。それが育ての心である。世にこんな楽しい心があるであろうか」で始まる本書は、現在でも多くの人に影響を与えています。

倉橋惣三 著
■18×12cm・176頁 定価：本体830円+税



育ての心 (下)

フレーベル新書⑬

保育者へのメッセージだけでなく、母親や一般の婦人に対しても、子どもの心理や行動、その教育などについて理解を深める内容で、文章も分かりやすく書かれています。

倉橋惣三 著
■18×12cm・232頁 定価：本体850円+税



倉橋惣三・その人と思想

フレーベル新書⑭

幼児教育の先駆者・倉橋惣三の著書や思想を分かりやすく解説。これから倉橋を知りたい人のための、格好の入門書となっています。

坂元彦太郎 著
■18×12cm・184頁 定価：本体750円+税

キンダーブックの
フレーベル館

新しい子ども観・保育観に立ち、
これからの保育の確立に役立つ保育用語辞典。

現代保育用語辞典

付：外国の保育教育 40か国



好評発売中!!

編集委員＝岡田正章・千羽喜代子・網野武博・上田礼子・

大戸美也子・大場幸夫・小林美実・中村悦子・荻原元昭

執筆者 保育及び隣接分野の最高権威者330名が参画。

保育者、保育研究者、保育者養成課程に学ぶ学生等を対象に、保育に関する用語約2,000語を精選し、解説。保育を語る時に欠かせない基本用語、新しい保育観、子ども観から出てくる言葉を通して、保育の真髄とこれからの保育のあるべき姿をわかりやすく示す辞典。保育の国際性に対応し、項目語に英訳を添えた。

22×16cm・592頁 定価：本体7,767円+税

キンダーブックの
フレール館